

始

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 cm

319  
572

# 商業簿記教科書

## 下卷

商學士 吉田良三校閱  
商業教育研究會編

東京  
文信社發行

特 254  
885



商業簿記教科書

下 卷

商學士 吉田良三 校閱

商業教育研究會 編

---

東 京

文 信 社 發 行

1929



## 序

曩に商業教育研究會に於て、初等實業教育普及の爲め、諸氏相謀り、多年實際的教授の經驗に基き、茲に高等小學校商業科兒童用教本として、商業簿記教科書を編纂せられ、余に校閲を求めらる。今卷を繕いて之を閲するによく簡にして要を竭くし、説明懇篤極めて理解し易し。初めて商業簿記を學ぶ者、及び教授する者にとつて、最も適切なる教科書なりと云ふも過言にあらず。余嚴に校閲し且つ二三の惟ふ所を附し敢て江湖に薦む。

昭和四年三月

商學士 吉田良三 識

## 商業簿記教科書 下卷

### 目 次

第一章	財産と資本	1
第二章	貸借対照表と取引	3
第三章	勘定及び勘定科目	8
第四章	資産勘定	11
第五章	負債勘定	20
第六章	正味財産の計算	24
第七章	資本金勘定	30
第八章	損益勘定	33
第九章	元帳と仕譯帳	36
第十章	記帳(其の一)	41
第十一章	記帳(其の二)	46
第十二章	試算表と棚卸表	49
第十三章	決算	53
第十四章	決算諸表	60
第十五章	第一例題	66
第十六章	第二例題	68
第十七章	帳簿	70
第十八章	手形の取引	72
第十九章	第三例題	80
第二十章	仕譯帳の分割	82
第二十一章	第四例題	85

---

# 商業簿記教科書 下巻

商學士 吉田良三校閱

商業教育研究會編

## 第一章 財産と資本

**財 産** 財産と云ふ言葉の内には資産と負債との兩者を含む。資産とは現金及び現金に換へ得るもの一切を云ひ、負債とは現金を支拂はねばならぬ義務あるもの一切を云ふ。商品什器掛賣金預金の如きは前者の例で、掛買金借入金等は後者の例である。

**資本又は資本金** 資産負債表の左側には資産を、右側には負債を記入し、資産の合計から負債の合計を差引いて得た金額を、正味財産として負債の下に記入することは、單式簿記に於て既に學んだ。此の正味財産のことを資本又は資本金と云ふのである。而して此の資本又は資本金とは、資産の内の現金を指すのでも商品を指すのでもない。唯資産と負債の差額を指

すのである。此の事は資産負債の増減と資本の関係を知る上に於て、極めて大切なことであるから、能く知つて居らねばならぬ。之れを式で示せば次の如くなる。

$$(\text{資産}) - (\text{負債}) = \text{資本金}$$

- 【註】 (1) 若し資産のみで負債がなければ資産と資本金とは一致する。  
 (2) 負債の方が資産よりも多ければ其の差額は正味借財である。

### 練習問題

資産負債表ヲ作り資本金ヲ示セ。

- (1) 現金 ¥1,000.- 商品 ¥3,000.- 掛賣金 ¥2,000.- 掛買金 ¥2,500.- トスレバ資本金何程カ。  
 (2) 現金 ¥500.- 商品 ¥2,000.- 掛賣金 ¥1,000.- 借入金 ¥2,000.- トスレバ資本金何程。  
 (3) 現金 ¥1,000.- 預金 ¥2,500.- 掛賣金

¥4,000.- 掛買金 ¥5,000.- 借入金 ¥1,500.-  
 トスレバ資本金何程。

- (4) 現金 ¥5,000.- 商品 ¥5,000.- 什器 ¥1,000.-  
 家屋 ¥3,000.- 公債株券 ¥15,000.- 掛賣金 ¥15,000.- 掛買金 ¥25,000.- 貸附金 ¥2,000.- 借入金 ¥8,000.- 預金 ¥5,000.-  
 トスレバ資本金何程。

## 第二章 貸借対照表と取引

貸借対照表 單式簿記で習つた資産負債表のことを、複式簿記では貸借対照表と云ふ。全く同一性質のものであつて、其の左側には資産、右側には負債と資本金が表れる。以下貸借対照表とする。

取引の吟味 次の如き事柄(取引)が起れば、貸借対照表の資産負債及び資本金に種々の變化が生ずる。其の内には資本金を増減するものと資本金を増減しないものがある。

貸借対照表 (其の一)		貸借対照表 (其の二)	
現金 2,000	掛買金 4,000	*現金 4,000	掛買金 4,000
商品 3,000	借入金 1,000	商品 3,000	借入金 1,000
什器 500	資本金 3,500	什器 500	資本金 3,000
掛賣金 3,000		*掛賣金 1,000	
8,500	8,500	8,500	8,500

【例一】 掛賣金 ¥2,000.-ヲ現金ニテ受取ル。

とすれば、貸借対照表は(其の二)の如く變る。即ち掛賣金に於て ¥2,000.-を減ずると同時に、現金に於て其れと同じ金額が増して居る。故に此の變化は單に資産の内の或る項目(掛賣金)と、他の或る項目(現金)との増減に過ぎないから、資産の合計には變りがない、従つて資本金にも變りがない。

貸借対照表 (其の三)		貸借対照表 (其の四)	
*現金 3,000	掛買金 4,000	*現金 2,500	掛買金 4,000
商品 3,000	*借入金	商品 3,000	*資本金 3,000
什器 500	資本金 3,500	什器 500	
掛賣金 1,000		掛賣金 1,000	
7,500	7,500	7,000	7,000

【例二】 借入金 ¥1,000.-ヲ現金ニテ支拂フ。

とすれば、貸借対照表(其の二)は(其の三)の如く變る。

即ち資産(現金)に於て ¥1,000.-を減ずると同時に負債(借入金)に於ても其れと同じ金額を減じて居る。其れ故 (資産)-(負債)=(資本金) の關係に變化はない。若し又商品 ¥2,000.-を掛買すれば資産(商品)が増すが、其れと共に負債(掛買金)も増すから、資本金は依然變らない。

【例三】 廣告料 ¥500.-ヲ現金デ拂ツタ。

とすれば貸借対照表(其の三)は(其の四)の如く變る。即ち資本金は ¥500.-を減じて ¥3,000.-となつた。而して資本金が減つた理由は例一の如く資産が減少しても、其れと同額の他の資産が増加するか、又は例二の如く資産が減少しても、其れと同時に負債も減少すれば資本金は變らないが、例三の如く資産が ¥500.-減じて、他に其れに相當する増減がない時には (資産)-(負債) = (資本金) の關係上資本金は其れ丈減少せざるを得ない。運賃や給料等を支拂つた場合も其れと同様である。

【例四】 利子トシテ現金 ¥200.-ヲ受取ツタ。

とすれば、貸借対照表(其の四)は(其の五)の如くな

## 貸借対照表(其の五)

*現金 2,700	掛買金 4,000
商品 3,000	*資本金 3,200
什器 500	
掛賣金 1,000	
7,200	7,200

る。則ち資産(現金)は  
Y200.-を増し他の資産  
又は負債の項目の何  
れにも其れに相当す  
る増減が無いから、資  
産が増すと共に其丈資本金も増したのである。

**取引の意味** 以上の例の如く、資産負債又は  
資本金の或る項目(商品掛買金等々)の金額に増  
減を生ずる一切の出来事を總べて取引と云ふ。  
其れ故商品の賣買、金銭の貸借、運賃、廣告料等の  
支拂は言ふ迄もなく、其の他火災盗難等にかゝ  
り家屋金銭物品等を失ふことも、家屋什器等が  
使用するにつれ其の價值を減損することも、又  
は所有する公債株券等が相場の騰落によつて  
價格を増減することも、一切簿記上では取引と  
見なし記帳計算するのである。

**取引の二大別** 例一及び例二の如く資産負  
債が如何程増減しても、資本金は少しも増減し  
ない取引と、例三及び例四の如く資産又は負債  
の或項目が増し或は減じたに係らず、其れに相

當する他の項目の増し或は減が無い爲めに

## 資産 - 負債 = 資本金

の關係が直ちに破れて、資本金を其れ丈増し  
或は減ずる取引とがある。前者を交換取引と  
云ひ、後者を損益取引と云ふ。此の區別は取引  
を記帳計算する場合、極めて大切であるからよ  
く注意して判斷を誤らぬ様せねばならぬ。又  
原價Y100.-の商品をY120.-に賣つてY20.-の  
利益を得たとすれば、交換取引と損益取引を兼  
ねるから、かゝる取引を混合取引と云ふ。

## 練習問題

- (1) 自己所有ノ店舗ガ火災ノ爲メ燒失シタ、  
取引デアルカドウカ。
- (2) 店舗新築ノ爲メ新ニ土地借入ノ契約ヲ  
シタ、取引デアルカドウカ。
- (3) 資産ノ項目ノ間ニ金額ノ増減ガアツテ、  
資本金ノ増減セヌ取引例三ツヲ舉ゲヨ。
- (4) 資産負債ノ兩方ニ金額ノ増シ或ハ減ガ  
アツテ、資本金ノ増減セヌ取引例三ツヲ  
舉ゲヨ。



- (5) 資産が増シ或ハ減ズルト共ニ、資本金モ増減スル取引例三ツヲ擧ゲヨ。
- (6) 次ノ取引ハ交換取引デアルカ、又ハ損益取引デアルカ。
- (イ) 商品 ¥500.-ヲ現金デ買入レタ。
- (ロ) 商品 ¥300.-ヲ掛デ買ツタ。
- (ハ) 掛賣金 ¥400.-ヲ現金デ受取ツタ。
- (ニ) 現金 ¥500.-ヲ借入レタ。
- (ホ) 運賃 ¥50.-ヲ現金デ支拂ツタ。
- (7) 以上ノ取引ガ起レバ貸借對照表(其ノ五)ノ資産負債及ビ資本ノ各項目ハ如何ニ増減スルカヲ調べヨ。

### 第三章 勘定及び勘定科目

總ての取引は元帳にあり 單式簿記では、現金の出入は現金出納帳に、商品の仕入賣渡は仕入帳賣上帳に、掛賣掛買は日記帳元帳とそれぞれ別々の帳簿に記入し、財産の増減を計算したのであるが、複式簿記では總ての取引を一冊の元帳に記入し、之れを根據として貸借對照表も損益計算書も作るのである。故に元帳は最も

大切な帳簿である。元帳記入の仕方を充分會得すれば、複式簿記は大半判つた様なものである。以下數章に亘つて其の記帳の仕方を述べる。

**勘定と勘定科目** 數多い取引を其の内容によつて適當の項目に分類し、それぞれ記帳計算する場所が元帳に定めてある。其の定めてある場所を指して勘定又は口座と云ひ、口座の名稱を勘定科目と云ふ。元帳の勘定には、現金勘定・商品勘定・什器勘定・掛買金勘定・資本金勘定など色々ある。現金勘定には現金の出入許りを、商品勘定には商品の出入許りを記帳計算する。

元帳を作る場合如何なる勘定科目を設ければよいかは、營業の種類、規模の大小等を考へて決定せねばならぬ。而して一度定めた勘定科目は一會計期間中は決して變更してはならぬ。

**勘定科目の種類** 複式簿記では、總ての取引が元帳へ記帳されるから、勘定科目の種類は非常に多いが、大別して資産勘定、負債勘定、資本勘定の三つとし、更に資本勘定を正味財産の増減を示す資本金勘定と、正味財産増減の原因を示

す損益勘定との二つに分ける。普通用ひられる勘定科目は次の如きものである。

### (一) 資産勘定

- (1) 現金
- (2) 預金
- (3) 受取手形
- (4) 掛賣金
- (5) 商品
- (6) 有價證券
- (7) 貸附金
- (8) 什器
- (9) 不動産等

### (二) 負債勘定

- (1) 支拂手形
- (2) 掛買金
- (3) 借入金等

### (三) 資本勘定

- (1) 資本金(正味財産の増減を示す勘定)
- (2) 損益勘定(正味財産増減の原因を示す勘定)

- (イ) 営業費(税金,家賃,地代,電燈料及び瓦斯代,通信費,給料,廣告料,文房具費等を含む)
- (ロ) 利息及び手数料
- (ハ) 運賃,車力賃
- (ニ) 保険料及び倉敷料
- (ホ) 雑損益

### 練習問題

- (1) 単式簿記ノ元帳ト複式簿記ノ元帳ノ相違スル點ヲ舉ゲヨ。
- (2) 元帳ノ口座又ハ勘定トハ何カ。
- (3) 勘定科目ノ種類ヲ舉ゲ,其ノ例三ツ宛ヲ示セ。
- (4) 勘定科目設定上ノ注意ヲ述ベヨ。

## 第四章 資産勘定

複式簿記の元帳の罫は,単式簿記の元帳の罫と殆んど同様であるが,説明の便宜上,元帳を最も簡單化した丁字形勘定を用ひて,元帳口座記入の仕方を示さう。而して記入の仕方は勘定

の種類によつて相違する。

資産勘定は(1)資産 (左) 資産勘定 (右)  
 の増加を左方へ(2)資 (1) 資産の増加(2) 資産の減少  
産の減少を反対側の右方へ記入する。 資産を  
 左方へ記入するについての理由は別に無い、唯  
 昔からの習慣である、資産の減少を右方へ記入  
 するのは、左方から差引く爲の反対記入である。

(一) 現金勘定 通貨及び他人より受取つた  
 小切手・郵便爲替・送金の手形等、直ちに金銭に換  
 へ得るものは總て此の口座へ記入し、其の増減  
 を計算する。受入高を口座の左方へ、支拂高を  
 右方へ記入する。

(1) 甲ヨリ現金 (左) 現金 (右)  
 ¥ 500.- 受取ル。 (1) 受入高 500 (2) 支拂高 300  
 (2) 乙へ現金 ¥ 300.- 支拂フ。

記入の仕方 (1) ¥ 500.- は現金を受取つた爲め  
 の増加記入であり(2) ¥ 300.- は現金を支拂つた爲  
 め其れ丈金額が減少した事を示す爲めの差引  
 記入である。總て左方(¥ 500.-)から或金額(例へ  
 ば ¥ 300.-)を引く場合(¥ 500.-) - (¥ 300.-) とする

代りに其の反対の側乃ち右方へ金額 ¥ 300.- を  
 記入し、又右方から或金額を引くには其の反対  
 の側乃ち左方へ其の金額を記入すればよい。  
 之れは簿記特有の計算の仕方であつて反対記  
 入又は差引記入と云ふ。

残高の示し方 現金勘定の左方は受入(増加  
 高であり、右方は支拂(差引)高であるから、左方合  
 計と右方合計との差額 ¥ 200.- は現金の残高  
 である。残高を示すには赤インキで其の口座  
 の右方へ次の如く記入し、左方の合計が右方の  
 (左) 現金 (右) 合計よりも其れ丈多いこ  
 とを表す、従て赤インキで  
 (1) 500 (2) 300 書いた金額は右方にある  
 500 200 けれ共、其れは資産である。  
 500 500

(二) 預金勘定 (預け入高左方、引出高右方)

(三) 貸附金勘定 (貸附高左方、取立高右方)

(四) 掛賣金勘定 (左) 掛賣金 (右)  
 (掛賣高は左方、代  
 金取立高・貸倒高  
 戻り品・残高は右方) 掛賣高 | 取立高  
 | 貸倒高  
 | 残高

以上の勘定は其の記帳の仕方も残高の示し方も現金勘定と同様である。

(五) 商品勘定 (仕入高・戻り品左方, 賣渡高・返送品・棚卸高右方)

(1) 商品 ¥ 500.- (左)	商 品	(右)
買入ル。	(1) 仕入高 500	(2) 賣渡高 350
(2) 原價 ¥ 300.-		
商品ヲ ¥ 350.-ニ 賣渡ス。		
(3) 商品棚卸高 ¥ 200.-		

**記入の仕方** 左方 ¥ 500.- は商品を仕入れた爲め増加記入であり, 右方 ¥ 350.- は商品を賣渡した爲に, 其れ丈商品の減少した事を示す爲めの差引き記入である。

**残高の見出し方** 併し實際は仕入値段と賣渡値段とでは單價が違ふから, 左方の仕入高から右方の賣上高を引いた丈では, 商品の残高を知ることは出来ぬ。其れ故残高を知る爲には是非共實際について商品の在 high を調べ, 棚卸高(残高)を見出さねばならぬ。此の點が帳簿上で差引の出来る現金勘定の残高見出し方とは大

いに相違する。

**販賣益の見出し方** 商品棚卸高を (¥ 200.-) 右方の賣上高に加へ, 右方の合計から左方の合計を引けば, 商品販賣益が判るのである。

$$\begin{aligned} & (\text{賣上高}) (\text{棚卸高}) (\text{仕入高}) (\text{販賣益}) \\ & (\text{¥}350.- + \text{¥}200.-) - \text{¥}500.- = \text{¥}50.- \end{aligned}$$

之れを商品勘定に記帳計算すれば次の如くなる。

(左) 商 品	(右)	要するに商品勘定
(1) 仕入高 500	(2) 賣上高 350	は商品の増減を記
損益 50	(3) 棚卸高 200	帳計算すると共に
550	550	(1) 棚卸によつて残

高を知り (2) 棚卸高を右方の賣上高に加へ, 右方と左方との差額を計算して利益又は損失を見出すのである。右方が多ければ利益, 左方が多ければ損失である。

(六) 什器勘定 椅子, 机, 自轉車, 衡器, 金庫, 電話等の營業用什器を含む。(買入高は左方, 賣渡高, 棚卸高は右方)

(七) 不動産勘定 土地, 家屋を含む。(買入高は左方, 賣渡高, 棚卸高は右方)

(八) 有價証券勘定 公債,株券,債券等を含む。

(買入高は左方,賣渡高,棚卸高は右方)

以上の諸勘定は其の記帳の仕方も,棚卸高を右方に赤字で記入し,損益を計算することも商品勘定と同一である。

### 記入例題

(1) 商品 ¥3,000.-現金で買入レタ。

商 品	現 金
3,000	3,000

(2) 商品 ¥2,000.-を現金で賣渡シタ。

商 品	現 金
2,000	2,000

(3) 金庫一個買入レ現金 ¥300.-拂ツタ。

現 金	什 器
300	300

(4) 商品 ¥5,000.-を掛で賣ツタ。

商 品	掛 賣
5,000	5,000

(5) 乙商店カラ掛代金 ¥1,000.-受取ツタ。

現 金	掛 賣 金
1,000	1,000

(6) 商品 ¥6,000.-を賣り代金ノ内 ¥4,000.-ハ現金で受取り,残高ハ掛トシタ。

現 金	掛 賣 金	商 品
4,000	2,000	6,000

(7) 什器 ¥500.-を買入レ,決算ノ時棚卸高 ¥450.-トナツタ損益何程。

什 器			
仕入高	500	棚卸	450
		損益	50
	500		500

(8) 商品仕入高 ¥6,000.-賣上高 ¥5,000.-棚卸高 ¥1,300.-トスレバ賣買益何程。

商 品			
仕入高	6,000	賣上高	5,000
		棚卸高	1,300
	6,300		6,300

以上の記入例を見ても判るが、(1)取引は必ず或る口座の左方と他の口座の右方とに記入される。決して左方のみ、又は右方のみに入される事はない。(2)而して左方の金額と右方の金額は常に一致する。若し一致しなければ複式簿記は成り立たない。例(6)の如く記帳が三つの口座に亘るときでも、其の左方の金額と右方の金額とは必ず一致する。其れ故、記帳の際金額に間違なきか、左右の金額は相一致するかを確かめた上で、記入すべきである。

### 練習問題

次ノ問題ハ何勘定ト何勘定ニ記入スレバヨイカ、又左方ト右方トノ金額ガ一致スルカヲ調べヨ。

- (1) 商品 ¥3,000.- ヲ現金デ買入レタ。
- (2) 現金 ¥2,000.- ヲ當座預金ニ預ケ入レタ。
- (3) 商品 ¥ 500.- ヲ現金デ賣ツタ。
- (4) 商品 ¥ 500.- ヲ掛賣シタ。
- (5) 山本太郎へ現金 ¥ 500 貸シタ。

- (6) 掛賣金 ¥500.- 現金デ受取ツタ。
- (7) 商品 ¥1,000.- ヲ買ヒ代金ノ内 ¥600.- ハ現金、残金ハ掛トス。
- (8) 商品 ¥2,000.- ヲ賣リ代金ノ内 ¥500.- ハ現金デ受取り残金ハ掛トス。
- (9) 什器 ¥500.- ヲ現金デ買入レタ、決算ノ時棚卸高 ¥480.- トナツタ損益何程、丁字勘定デ表セ。
- (10) 甲號公債額面 ¥10,000.- ヲ ¥9,600.- デ買入レ現金ヲ支拂ツタ。決算ノ際棚卸高ハ ¥9,650.- トナツタ損益何程。
- (11) 次ノ商品賣買損益ヲ計算シナサイ。
  - (イ) 仕入高 ¥3,000.- 賣上高 ¥2,600.- 棚卸高 ¥800.-
  - (ロ) 仕入高 ¥5,700.- 賣上高 ¥4,900.- 棚卸高 ¥1,000.-

### 第五章 負債勘定

負債勘定は(1)負債 負債勘定  
の増加を右方へ(2)負債の減少(1)負債の増加  
債の減少を反対側の

左方へ記入する。 負債は借金である、借金があれば資産は其れ丈減少する、其れ故左方にある資産を差引く意味に於て負債を右方に記入する。而して借金を支拂つた場合は、右方の借金を取消す意味に於て支拂高を左方へ反対記入をするのである。

(一) 掛買金

【例1】 甲商店ヨリ商品 ¥500.- ヲ掛デ買入ル。

【例2】 甲商店へ掛買代金 ¥500.- ヲ現金デ支拂ツタ。

【例3】 乙商店カラ商品 ¥3,000.- ヲ掛買シタ。

【例4】 乙商店へ掛買

(左) 掛買金 (右)

支拂高	掛買高
残高	

掛買金(其の一)

(2) 500	(1) 500
---------	---------

掛買金(其の二)

(4) 200	(3) 3,000
---------	-----------

代金ノ内 ¥2,000.- ヲ現金デ支拂ツタ。

(例1) ¥500.- は商品を掛買した爲め、其れ丈資産の減少を示す爲めの反対記入(差引記入)であり、(例2) ¥500.- は掛買金を支拂つたから、右方の負債を差引く意味に於て、左方へ反対記入をして帳消しするのである。掛買金勘定(其の一)は掛買金全部支拂済であるが、(其の二)は掛買高 ¥3,000.- 支拂高 ¥2,000.- であるから、掛買金が尙 ¥1,000.- 残つて居る。其の記帳の仕方は次

(左) 掛買金	(右)
(4) 2,000	(3) 3,000
1,000	

の如くする。乃ち赤インキで其の口座の左方へ残高を記入し、右方の負債が左方の支拂高よりも尙ほ多きことを示す。従つて赤字記入の残高が左方にあるけれども其れは負債である。

(二) 借入金勘定 (支拂高、残高左方、借入高右方)

借入金勘定は其の記入の仕方も、残高の示し方も、掛買金勘定と同一である。

## 記入例題

- (1) 商品 ¥2,000.- 掛デ買入レタ。

商 品	掛買金
2,000	2,000

- (2) 商品 ¥3,000.- ヲ買入レ、代金ノ内 ¥2,000.- ハ現金デ支拂ヒ残額ヲ掛トシタ。

(記入が三口座に亘つても其の左方と右方の合計金額は常に一致する)。

商 品	現 金	掛買金
3,000	2,000	1,000

- (3) 太田次郎ヨリ現金 ¥3,000.- 借入レ擔保トシテ甲號五分利公債額面 ¥4,000.- ヲ預ケタ。

現 金	借入金
3,000	3,000

此の場合、公債證書は單に擔保として先方へ預けて置く丈で、所有權は自分にある、讓渡した

のでないから元帳へ記入はしない。

- (4) 乙商店へ商品掛買代金ノ内 ¥1,000.- 現金デ支拂ツタ。

掛買金	現 金
1,000	1,000

掛買金の ¥1,000.- は掛買金を支拂つたのであるから、右方の負債を取消す意味の反對記入である。

## 練習問題

次ノ問題ヲ現金勘定、掛買金勘定、掛賣金勘定、借入金勘定ニ記帳シ、残高何程アルカ、又其ノ残高ハ資産カ負債カヲ答ヘヨ。

- (1) 山川商店カラ商品 ¥2,000.- ヲ掛買シタ。
- (2) 田中太郎カラ現金 ¥1,000.- 借入レタ。
- (3) 山川商店へ掛買金ノ内 ¥500.- ヲ現金デ支拂ツタ。
- (4) 田中太郎へ借入金 ¥1,000.- ヲ現金デ支拂ツタ。
- (5) 西村商店へ商品 ¥400.- ヲ掛賣シタ。
- (6) 商品 ¥5,000.- 買入レ代金ノ内 ¥3,000.- ハ現金デ支拂ヒ、残額ハ掛トスル。



## 第六章 正味財産の計算

取引の結果利益があれば正味財産は其れ丈増加し、損失があれば其れ丈減少する。例へば手数料として現金 ¥100.- 受取れば、正味財産は ¥100.- 増したことになる。此の場合単式簿記では単に現金出納帳に記帳する丈で、正味財産増減の記録は全くない。其處に單式簿記の缺點がある。唯期末決算の際今期の正味財産が何程ある、其れ故前期決算の時よりも何程の利益又は損失があつたと云ふ事が、前期正味財産との比較によつて決定せらるゝに過ぎないから、極めて不正確な、又不完全な計算法と云はねばならぬ。何故ならば、單式簿記では萬一記帳もれ、又は金額の誤記等があつても、後日其れ等の間違を發見することは殆んど稀で、其のまゝ過ぎて仕舞ふ場合が多いからである。既に記帳に間違があつたとすれば其れによつて算出された資産負債表の正味財産高が正確で無いのは云ふ迄もない。然るに複式簿記では、假

りに手数料 ¥100.- 現金で受取つたとすれば、現金勘定(資産)へ ¥100.- 増加の記入をすると共に、別に正味財産勘定を設け、正味財産が ¥100.- 増加したことを記入する。恰も

資産 - 負債 = 正味財産 なる等式の兩項へ増加の記入をしたと同じことになる。其れ故、資産が増せば正味財産も増し、資産が減れば又正味財産も減る。何回記帳を重ねても同様であつて、此の等式の關係は永久變らない。若し記帳の途中に於て金額に誤記・脱漏等があれば等式は成立しない。乃ち正味財産高と(資産 - 負債)の金額が一致しないから、誤記脱漏等は必然的に發見せられるのである。決して間違を其のまゝ見逃すことはない。其處に複式簿記の確實性がある。例を擧げて正味財産勘定の記入法を示さう。

記入の仕方 (左)	正味財産 (右)
正味財産 (3) 其後の減少(損費)	(1) 最初の元入
勘定は	(2) 其後の増加(利益)

(1)最初の元入高を右方へ(2)其の後の利益(資本の増加)を同じく右方へ(3)其の後の損費(資本の減少)を反対側の左方へ記入する。複式簿記では營業主と資本主とを別個のものと見なす、其れ故、營業主から見れば正味財産(資本金)は資本主に對する負債である。故に記入の方法も負債勘定と同じく増加を右方へ、減少を左方へ記入するのである。

記入例題

(1) 現金 ¥ 1,000.- ヲ元入トシテ營業ヲ始ム。  
(元入故に正味財産の右と現金の左)

正味財産	現金
5,000	5,000

(2) 店主私用ノ爲メ現金 ¥ 3,000.- ヲ引き出す。

(資本の減少故に左方と現金の右方)

正味財産	現金
300	300

(3) 現金 ¥ 200.- 商品 ¥ 400.- ヲ元入トシテ

追加ス。

(資本増加故に右方,現金,商品左方)

正味財産	現金	商品
600	200	400

【註】 正味財産高は (¥ 200.- + ¥ 400.-) = ¥ 600.-

(左) 正味財産	(右)	(4) 現金 ¥ 2,000.- 借入金 ¥ 1,000 ヲ元入トシテ營業ヲ始ム。 (資産 - 負債 = 正味財産 = ¥ 1,000.-)
(5) 200	(4) 1,000	(5) 廣告料 ¥ 200.- 現金デ拂ツタ。 (資本の減少故に左方) (6) 運賃 ¥ 50.- 現金デ拂ツタ。 (損失故に資本の左方) (7) 手数料 ¥ 100.- 現金デ受取ル。 (利益故に右方) (8) 給料 ¥ 150.- 現金デ拂ツタ。
(6) 50	(7) 100	
(8) 150	(10) 60	
(9) 80		
(11) 300		
(12) 100		
280		
1,160	1,160	
現金		
(4) 2,000	(5) 200	
(7) 100	(6) 50	
(10) 60	(8) 150	
	(9) 80	
	(11) 300	
	(12) 100	
	1,280	
2,160	2,160	

借入金	(4) 1,000	(9) 家賃 ¥80.- 現金デ拂 ツタ。 (損失故に資本の左方)
掛買金	(13) 1,000	(10) 利息 ¥60.- 現金デ受 取ツタ。 (損失故に資本の左方)
商 品	(13) 1,000	(11) 税金 ¥300.- 現金デ拂 ツタ。 (利益故に資本右方)
		(12) 保険料 ¥100.- 現金デ 拂ツタ。 (損失故に資本左方)
		(13) 商品 ¥1,000.- 掛買シタ。 (資本の増減なし、故に 正味財産勘定に記入 を要せず)

**残高の示し方** 正味財産勘定の右方は元入高及び其の後の増加(利益)を示し、左方は其の後の減少(損費)を示す。故に右方の合計から左方の合計を引いて得た残高 ¥280.- は、正味財産の現在高である。之れを示すには、残高を赤インキで左方に記入し、左方の諸損費を差引いても尚ほ右方の多きことを示せばよい。

上記の記入例によつて見る如く、取引の結果利益があれば資産勘定に増記入をすると共に必ず正味財産勘定にも増記入をする。損失があれば資産勘定に減記入をすると共に、正味財産勘定にも減記入をする。而して記帳の結果は、現金 ¥1,280.- 商品 ¥1,000.- 掛買金 ¥1,000.- 借入金 ¥1,000.- 正味財産 ¥280.- となつた。之れを式にて示せば、

$$\begin{array}{ccc} \text{資 産} & \text{負 債} & \text{正味財産} \\ (\text{¥1,280} + \text{¥1,000}) & - (\text{¥1,000} + \text{¥1,000}) & = \text{¥280} \end{array}$$

の等式が成り立ち、記帳の間違なき事が證明される。營業の始め(例4)と營業の終りとを貸借対照表で示せば次の如くなる。

貸借対照表(始め)		貸借対照表(終り)	
現 金 2,000	借入金 1,000	現 金 1,280	借入金 1,000
	正味財産 1,000	商 品 1,000	掛買金 1,000
2,000	2,000	2,280	2,280

乃ち取引を重ねるにつれ、資産負債の内容には種々の變化があつても、又正味財産高に増減があつても、資産 - 負債 = 正味財産 の關係

は依然として永久變らない。其處に複式簿記の特長がある。

### 練習問題

- (1) 現金 ¥ 5,000.- 掛買金 ¥ 2,000.- ヲ元入トシテ營業ヲ始ム。
- (2) 店主私用ノ爲メ現金 ¥ 500.- 引出ス。
- (3) 商品 ¥ 2,000 掛買スル。
- (4) 家賃 ¥ 100.- 現金デ支拂フ。
- (5) 税金 ¥ 150.- 現金デ支拂フ。
- (6) 手数料 ¥ 500.- 現金デ受取ル。
- (7) 給料 ¥ 100.- 現金デ支拂フ。
- (8) 保険料 ¥ 50.- 現金デ支拂フ。
- (9) 例(1)ノ貸借對照表ヲ作レ。
- (10) (1)ヨリ(8)迄ヲ順次丁字形勘定ニ記帳シ、其ノ結果ヲ貸借對照表ヲ以テ示セ。

## 第七章 資本金勘定

資本を増減する取引は、一方では資産負債勘定に其の増減を記帳すると共に、他方では正味

財産勘定にも其の増減を記帳し、常に正味財産の現在高を明かにするのが複式簿記の特長であることは前に述べた。併し實際記帳する場合は、正味財産勘定を資本金勘定と損益勘定とに分ち、資本金勘定には元入及び引出しによる増減のみを記帳し、其の他の原因による増減(損益)は總て損益勘定に記帳する。前者は正味財産の増減を明かにする爲めで、後者は増減の原因を知る爲めである。而して決算の時期が來れば、損益勘定は總ての損失利益を計算し、其の差額を資本金勘定に送り、其の使命を終るのである。其れ故、損益勘定は一時的の勘定又は假勘定とも云はれ、貸借對照表にも其の項目は表れない。

**記入の仕方** 資本金勘定は(1)引出高を左方へ(2)最初の元入高を右方へ(3)其の後の元入増加を同じく右方へ記入する(4)又決算の際損益勘定を締切り、損失があれば左方へ、利

資本金	
(1) 引出高	(2) 最初の元入
(4) 損失高	(3) 元入追加
	(4) 利益高

益があれば右方へ記入する。

【註】 25頁正味財産の記入仕方の説明参照。

### 記入例題

- (1) 現金 ¥5,000.- 商品 ¥4,000.- ヲ元入トシテ營業ヲ始ム。

現金	商品	資本金
5,000	4,000	9,000

- (2) 現金 ¥2,000.- 掛賣金 ¥5,000.- 掛買金 ¥4,000.- ヲ元入トシテ營業ヲ始ム。

現金	掛賣金	掛買金	資本金
2,000	5,000	4,000	3,000

資産と共に負債も同時に元入したる時は、資産と負債の差額を資本金勘定に記入する。

- (3) 店主私用ノ爲メ現金 ¥200.- 引出ス。

現金	資本金
200	200

私用の爲め現金を引出せば、營業の資本は其れ丈減少する、其れ故資本金を差引く意味に於て反對記入をする。

### 練習問題

- (1) 現金 ¥7,000.- ヲ元入トシテ營業ヲ始ム。  
 (2) 現金 ¥2,500.- 商品 ¥4,000.- 掛賣金 ¥5,000.- 掛買金 ¥6,000.- ヲ元入トシテ營業ヲ始ム。  
 (3) 店主私用ノ爲メ現金 ¥500.- 引出ス。  
 (4) 店主私用ノ爲メ商品 ¥100.- 引出ス。

## 第八章 損益勘定

損失利益の原因を示す勘定である。營業費勘定、利息勘定、手数料勘定、運賃及び車力賃勘定、雜損益勘定等の諸口座がある。

記入の仕方 損益勘定は何れの口座も(1)損失は左方へ(2)利益は右方へ記入する。損益勘定と資本金勘定とは同身一體

(左) 損益勘定 (右)

損失	利益
----	----

恰も支店と本店との関係の如きものである。其れ故、利益あれば本店の資本金はそれ丈増加する、故に利益を右方へ、又損失あれば本店の資本はそれ丈減少する、故に資本金を差引く意味に於て反対側の左方へ記入する。(本書第六章参照)

- (一) **営業費** 家賃、給料、通信費、税金、広告料、電燈、瓦斯、水道料等の雑費を含む。支拂の際左方へ記入する。締切の仕方は左方の合計金額を赤インキで右方へ記入し、摘要には同じく赤インキで損益と書く。
- (二) **運賃及び車力賃** 但し仕入運賃は商品仕入値段に加へ此の勘定に記入しない。
- (三) **保険料及び倉敷料**

以上(二)、(三)の二口座は支拂の時何れも左方に記入し、締切の仕方は営業費勘定と同一である。

- (四) **利息及び割引料**

(左) 利息 (右)	
支拂高	受取高
(損失)	(利益)

- (五) **手数料**

以上(四)、(五)の二勘定は支拂のとき左方へ受取の時は右方へ記入する。締切の仕方は利

益(右方)と損失(左方)とを各々合計し、利益多ければ左方へ赤インキで其の差額を記入し摘要には損益と書く。同様に損失が多ければ右方へ記入する。

### 記入例題

- (1) 給料 ¥ 300.- 現金デ支拂フ。

現金	営業費
300	300

- (2) 商品 ¥ 3,000.- 現金デ賣渡シ運賃 ¥ 50.- 現金デ支拂フ。

商品	現金	運賃
3,000	3,000	50
		50

【註】 運賃は営業費に記入してもよし。

- (3) 商品 ¥ 1,500.- 掛デ買入レ引取り運賃 ¥ 30.- 現金デ支拂フ。

【註】 運賃又は営業費勘定記入なし。

商品	現金	掛買金
1,530	30	1,500

- (4) 昭和銀行へ割引料 ¥50.- 現金で支拂フ。

現金	割引料
50	50

- (5) 販賣手数料 ¥500.- 現金で受取ル。

現金	手数料
500	500

## 練習問題

- (1) 預金ノ利子 ¥15.- 現金で受取ル。
- (2) 配達運賃 ¥20.- 現金で支拂フ。
- (3) 広告料 ¥300.- 現金で支拂フ。
- (4) 保険料 ¥200.- 小切手第一號で支拂フ。
- (5) 電燈料 ¥15.- 現金で支拂フ。
- (6) 開業諸入費 ¥400.- 現金で支拂フ。
- (7) 筆紙墨帳簿代 ¥30.- 現金で支拂フ。

## 第九章 元帳と仕譯帳

**元帳** 最も普通に行はれる元帳の様式は次の如きものである。

元 帳							
(左 方)				(右 方)			
現 金				現 金			
日附	摘 要	仕 子	借 方	日附	摘 要	仕 子	貸 方

中央の縦の線によつて左右二つに分れて居る。一方には増加高を他方には減少高を記入する。左方を借方、右方を貸方と呼ぶ。借方貸方の名稱は單に左方、右方と云ふが如き意味で普通に云ふ貸借の意味は少しも無い。

元帳は總ての資産負債及び正味財産の増減を明かにし、其の残高を知る爲めに設くる帳簿であつて、各種の勘定口座が設けられてある。其れ故商品勘定を見れば商品の増減及び残高が現金勘定を見れば現金の増減及び残高が判る。其の他如何なる取引でも、其の口座を見れば直ちに其の増減及び残高を知ることが出来るが、其れのみではない、各口座の残高を集めて貸借對照表及び損益計算書を作り、營業全體と

しての總損益及び財政の状況をも明かにすることが出来る。斯くの如く元帳は最も大切な帳簿であつて、元帳一冊あれば會計の整理は遺憾なく出来るから、取引のある都度増減の生ずる各勘定に直接記入すればよい理由であるが、それでは實際上記入漏れや間違を生じ易いから、仕譯帳を作り、先づ仕譯帳に記入してからそれを元帳に轉記するのである。

**仕譯帳** 仕譯帳は取引の要領を日附順に記入し、營業の日記を作ると共に元帳に記入を要する勘定科目と、其の金額及び借方貸方の區別とを示すものである。次に仕譯帳の様式と記入例を示さう。先づ取引を丁字形勘定に記入し仕譯帳の記入と彼れ此れ對照する事にする。

**記入例題**

(1) 現金 ¥ 2,000.- ヲ元入シテ營業ヲ始ム。

借方(左)	現金	(右)貸方	借方(左)	資本金	(右)貸方
	2,000				2,000

(2) 山川商店カラ商品 ¥ 500.- 買入ル代金ノ

内 ¥ 200.- ハ現金殘額ハ掛トス。

(借方)商	品(貸方)	(借方)掛買金	(貸方)	(借方)現	金(貸方)
500			300		200

**仕 譯 帳**

日附	摘	要	元 丁	(左方) 借方金額	(右方) 貸方金額
5 1	現 金	資 本 金		2,000-	2,000-
		現金ヲ元入シテ營業ヲ始ム			
2	商 品	諸 口		500-	
		掛 買 金			300-
		現 金			200-
		山川商店カラ買入ル代金ノ			
		内 ¥ 200.- ハ現金, 殘額ハ			
		掛トス			

**記入の仕方** 仕譯帳記入の仕方は丁字形勘定記入の仕方と同様である。(例1)は現金と云ふ資産が増加すると共に、資本主に對して負債を生ず、故に現金の左(借方)と資本金の右(貸方)とに仕譯する。乃ち摘要欄の左へ現金、借方欄へ ¥ 2,000.- と記入し、次に摘要欄の右へ資本金、貸



方欄へ同じく ¥2,000.- と記入すればよい。(例2)は摘要欄の左へ商品,借方へ ¥500.- と記入し,次に摘要欄の右へ掛買金,貸方へ ¥300.- 同じく摘要欄の右へ現金,貸方へ ¥200.- と記入し,取引の要領を其の下に書く。斯くの如く取引を何勘定の借方と,何勘定の貸方とへ書くかを決定することを仕譯と言ふ。仕譯帳記入の際注意すべき點は次の二つである。

- (1) 總て取引には二つの方面がある。或勘定の借方へ記入すれば,必ず他の勘定の貸方へも記入する。決して借方のみ又は貸方のみに入力する事はない。而して,
- (2) 借方金額と貸方金額とは必ず相等しい。たとへ例(2)の如く一取引が三口座に別れて記入されても,其の借方貸方の金額は必ず一致するのである。其れ故,何度取引を重ねても,仕譯帳の借方貸方の金額は常に一致すべき筈である。之れを複式簿記の貸借平均の理と云ふ。

若し仕譯帳の金額を合計して,借方と貸

方とが一致せぬ場合があれば,記帳に間違のあつた證據であるから,間違を見出し訂正せねばならぬ。

### 練習問題

- (1) 單式簿記ノ元帳ト複式簿記ノ元帳ト相違スル點ヲ答ヘヨ。
- (2) 元帳ヲ何故最モ大切ナ帳簿ト云フカ。
- (3) 仕譯帳ト元帳ハ何レヲ先ニ記帳スルカ。
- (4) 仕譯帳ニハドンナ事柄ヲ記入スルカ。
- (5) 丁字勘定ノ左方ハ元帳ノ借方ノコトカ又ハ貸方ノコトカ。
- (6) 貸借平均ノ理トハ何カ。
- (7) 仕譯帳ノ借方貸方ノ合計ガ一致シナケレバ記帳ニ間違アル證據ダト云フハ何故カ。
- (8) 第十章(41頁)ノ記入例題ヲ全部丁字形勘定ニ記入シ次ニ仕譯帳ノ記入ト對照セヨ。

### 第十章 記帳(其の一)

#### 記入例題

6/1 現金 ¥1,500.- ヲ元入シテ營業ヲ始ム。

- 6/2 机,椅子,自轉車等ノ什器買入レ代金 ¥200.—  
現金ニテ支拂フ。
- "/4 中田商店カラ掛ニテ買入ル。  
A 商品 30個 @ ¥40.— ¥1,200.—
- "/6 開業諸入費 ¥50.— 現金ニテ支拂フ。
- "/8 松本商店ヘ掛ニテ賣渡ス。  
A 商品 15個 @ ¥46.— ¥690.—
- "/13 川西商店カラ掛デ買入レ引取車力賃  
¥20.— 現金ニテ支拂フ。  
B 商品 150個 @ ¥12.— ¥1,800.—
- "/15 中田商店ヘ掛買代金ノ内 ¥800.— 現金ニテ  
支拂フ。
- "/20 村上商店ヘ掛デ賣渡ス。  
B 商品 62個 @ ¥13.— ¥806.—
- "/25 松本商店ヘ次ノ通り賣渡シ代金ノ内  
¥400.— ハ現金ニテ受取り残額 ¥580.— ハ掛  
トス。  
B 商品 70個 @ ¥14.— ¥980.—
- "/28 村上商店カラ掛賣代金 ¥806.— 安田銀行宛  
小切手#5(第五號)ニテ受取ル。

- 6/30 本日家賃 ¥50.— 給料 ¥30.— 電燈瓦斯代  
¥15.— 現金ニテ支拂フ。

"/ 本日決算棚卸次ノ通り。

商 品

A 商品 15個 @ 40.— ¥600.—

B 商品 18個 @ 12.— ¥216.—

什 器

自轉車其ノ他 見積價格 ¥180.—

仕 譯 帳

日附	摘 要	元 子	(左方) (右方)	
			借方	貸方
6 1	現 金	2	1,500—	
	資本金	1		1,500—
	現金ヲ元入シテ營業ヲ始ム			
2	什 器	4	200—	
	現 金	2		200—
	机椅子其ノ他何點現金買			
4	商 品	3	1,200—	
	掛買金	5		1,200—
	中田商店ヨリ掛買			
	A 商品 30個 @ ¥40.—			
6	營業費	1	50—	
	現 金	2		50—
	開業諸入費支拂			
	次へ		2,950—	2,950—

前ヨリ			2,950	2,950
6	8	掛賣金	690	690
		商品		
		松本商店へ掛賣		
		A商品 15個 @ ¥ 46.-		
13		商品	1,820	
		諸口		
		掛買金		1,800
		現金		20
		川西商店カラ掛買, 取引運賃		
		¥ 20.- 現金拂		
		B商品 150個 @ ¥ 46.-		
15		掛買金	800	
		現金		800
		中田商店へ掛代金ノ内拂		
20		掛賣金	806	
		商品		806
		村上商店へ掛賣		
		B商品 62個 @ ¥ 13.-		
25		諸口		980
		商品		
		掛賣金	580	
		現金	400	
		松本商店へ賣渡シ代金ノ内		
		¥ 400.-ハ現金残額ハ掛トス		
28		現金	806	
		掛賣金		806
		村上商店カラ掛代金ニ對シ安田		
		銀行宛小切手 ¥ 5ヲ受取ル		
30		營業費	95	
		現金		95
		本月分家賃 ¥ 50.- 給料 ¥ 30.-		
		電燈瓦斯代 ¥ 15.- 現金拂		
			8,947	8,947

【注意】 (1) 元丁欄の數字は仕譯帳から元帳へ轉記を濟せた證據となるものであつて、其の數字は轉記濟元帳の頁數を示す。其れ故未だ轉記を濟さぬ内は、元丁欄の數字を書いてはならぬ。

(2) 一取引の日記と仕譯は必ず同じ頁に書かねばならぬ。

(3) 丁字勘定記入の仕方と仕譯帳の記入の仕方とは同一である。

### 練習問題

次ノ問題ヲ仕譯帳ニ記帳セヨ。

- (1) 現金 ¥ 1,000.- ヲ元入トシテ營業ヲ始ム。
- (2) 開業諸入費 ¥ 30.- 現金デ支拂フ。
- (3) 自轉車其ノ他什器ヲ買入レ代金 ¥ 150.- 現金デ支拂フ。
- (4) 商品 ¥ 600.- 掛デ買入ル。
- (5) 商品 ¥ 250.- 現金デ賣渡ス。
- (6) 商品 ¥ 500.- ヲ賣渡シ代金ノ内 ¥ 300.- ハ現金デ受取り残額 ¥ 200.- ハ掛トス。

- (7) 商品 ¥230.- 現金で買入レ引取運賃 ¥15.- 別ニ現金で支拂フ。
- (8) 掛買代金ノ内 ¥400.- 現金で支拂フ。
- (9) 本月分諸雑費 ¥80.- 現金で支拂フ。
- (10) 仕譯帳ノ記帳ガ終ツテカラ借方合計ト貸方合計ガ一致スルカ調べヨ。
- (11) 仕譯帳ノ貸方合計ト借方合計トハ何故一致スルカ。

### 第十一章 記帳(其の二)

元帳轉記の仕方 例へば仕譯帳に

(借方)現金 ¥2,000.- (貸方)資本金 ¥2,000.-

とあれば、先づ元帳の現金勘定の貸方へ金額を記入し、次に(イ)日附(ロ)摘要(ハ)仕譯帳の頁数を順次記入する。此の轉記が済んでから、仕譯帳の元丁欄へ現金勘定の頁数を記入し、元帳轉記済の證とする。以上で借方の轉記は終るから今度は元帳資本金勘定の貸方へ前と同じ順序で同じ様に轉記する。元帳の摘要には相手方の勘定科目を轉記すればよい。前の例で云へば

現金勘定の相手方は資本金であるから現金勘定の摘要には資本金と記入し、其れと同様に資本金勘定の摘要には現金と記入すればよい。但し、十三日の取引の如く貸方勘定科目が二口以上になる時は、相手方商品勘定の摘要には諸口と書く、併し元帳轉記に慣れる迄初の間は摘要欄の記入を省いても差支へはない。

### 元帳

(左方)		資本金		(右方)		1	
昭和年	摘要	仕丁	借方	昭和年	摘要	仕丁	貸方
				6 1	現金	1	1,500-
				<b>現金</b>		<b>2</b>	
6 1	資本金	1	1,500-	6 2	什器	1	200-
27	商品	2	400-	6	營業費	1	50-
28	掛賣金	2	806-	13	商品	1	20-
				15	掛賣金	1	806-
				30	營業費	2	95-
				<b>商品</b>		<b>3</b>	
6 4	掛買金	1	1,200-	6 8	掛賣金	1	690-
13	諸口	1	1,820-	20	"	2	806-
				25	諸口	2	980-

仕 器				4
6	6	現 金	1	200—
掛 買 金				5
6	15	現 金	1	800—
		6	4	商 品 1 1,200—
			15	" " 1 1,800—
掛 賣 金				6
6	8	商 品	1	690—
	20	" "	2	806—
	25	" "	2	580—
		6	28	現 金 2 806—
營 業 費				7
6	6	現 金	1	50—
	30	" "	2	95—

### 練習問題

第十章45頁ノ練習問題ヲ仕譯帳カラ元帳へ  
轉記セヨ。

## 第十二章 試算表と棚卸表

**試算表** 仕譯帳から元帳へ轉記の際記入漏れや金額の誤り等が有つてはならぬから、其の有無を調べる爲めに作る表を試算表と云ひ、其の様式は次の通りである。

### 試 算 表

昭和 年 日 日

借 方	元 下	勘 定 科 目	貸 方
	1	資 本 金	1,500—
2,706—	2	現 金	1,165—
3,020—	3	商 品	2,476—
200—	4	仕 器	
800—	5	掛 買 金	3,000—
2,076—	6	掛 賣 金	806—
145—	7	營 業 費	
8,947—			8,947—

**記入の仕方** 試算表は元帳各勘定の借方貸方を夫々合計して作ったものである。今、元帳資本金勘定(47頁)を見るに、貸方合計は ¥1,500.— 故に試算表の勘定科目欄へ資本金とし貸方へ ¥1,500.— と記入する。元帳現金勘定の借方合

計 ¥ 2,706.— 貸方合計 ¥ 1,165.— 故に試算表資本金の下に現金と記入し、其の借方へ ¥ 2,706.— 貸方へ ¥ 1,165.— と記入する。而して資本金勘定は元帳の 1 頁にあるから元丁欄に 1 と記入し、現金勘定は 2 頁にあるから 2 と記入する。斯くして元帳にある各勘定の合計を借方と貸方に記入すれば、左右の金額は等しい筈である。何故なれば、複式簿記では各取引を或る勘定の借方に記入すれば、其れと同時に他の勘定の貸方にも記入せられ、且つ其の金額が取引毎に貸借相平均する故、元帳全勘定に於ける借方合計と貸方合計とは必ず相一致すべき筈である。若し貸借一致せざる時は、元帳轉記の際何處かに間違のある證據であるから、仕譯帳と元帳とをつき合せ其の誤を訂正せねばならぬ。

第十一章仕譯帳の借方貸方合計と試算表の借方貸方合計とが共に ¥ 8,947.— で全く相一致して居るのも前に述べた理由によるのである。又試算表の現金勘定の借方と、出納帳の収入合計と一致し、其の貸方は出納帳の支拂高と一致

する。商品勘定の借方を見れば今期の商品仕入高が判り、貸方を見れば商品賣上高が判るのも皆同一理由である。

かくの如く試算表は元帳轉記の正否を検し得るのみならず、併せて營業の狀況をも察知し得るを以て、獨り決算の時に限らず時々作製する必要がある。試算表には元帳各勘定の借方残高と貸方残高とを表した残高試算表と言ふものもある。

**棚卸表** 商品の仕入高及び賣上高は商品勘定によつて明かに判るが、商品の實際の残高はわからない。又、什器建物等は使用するにつれ其の價格が少しづつ減損するから、實際の價格と帳簿上の價格とは相違する。故に決算の際商品・什器・建物等は實地につき其の數量を調べ價格を決定し、其れ等の勘定の残高を修正せねばならぬ。其の爲めに作る表が棚卸表である。第十章記入例の棚卸表は次の如くなる。

## 棚卸表

昭和 年 月 日

摘要	内 訳	金 額
商 品		
A商品 15個 @ ¥40.—	600	
B商品 18個 @ ¥12.—	216	816
什 器		
自轉車其他 買入原價	200	
減價見積	20	180
		996

## 練習問題

- (1) 第十一章練習問題ノ元帳ニツイテ試算表ヲ作レ。
- (2) 試算表ノ借方合計ト元帳各勘定ノ借方總合計トハ何故一致セネバナラヌカ。
- (3) 試算表ノ借方合計ト仕譯帳ノ借方合計ト一致スル理由ハ何故カ。
- (4) 試算表ノ借方ト貸方ノ合計ガ一致スル理由ハ何故カ。
- (5) 試算表ハ何ノ爲メニ作ルカ,又何時作ルベキモノカ。

- (6) 棚卸表ハ何ノ爲メニ作ルカ。

## 第十三章 決 算

**決 算** 營業の結果,財産の上に種々の増減變化が起る。其れ故商人は適當の時期を定め資産負債の内容,資本の現在高等を明かにする爲めに貸借對照表と,營業の總損益を知る爲めに損益計算書とを作る。其の手續を決算と云ふ。複式簿記では總ての取引が元帳へ記帳されてゐるから,元帳について決算すればよい。

**決算手續** 普通行はれる手續は,

- (一) 試算表の作成 (説明略,十二章參照)
- (二) 棚卸表の作成 (同 上)
- (三) 元帳の締切 である。元帳締切の順序は

(1) **損益口座の開設** 總損益を集め純損益を計算する爲め元帳の最後へ損益口座を開く,既に其の口座あれば夫れを利用する。(59頁參照)

(借方) 商品(1) (貸方)		(2) 残高の修正 棚
仕入高 3,020	売上高 2,476	卸目録にある商品什器
	繰越 816	等の金額を商品勘定,什
		器勘定の貸方へ繰越と
(借方) 商品(2) (貸方)		して赤インキで記入し,
仕入高 3,020	売上高 2,476	(商品(1)参照)帳簿上の残
損益 272	繰越 816	高を棚卸残高に修正し,
<u>3,292</u>	<u>3,292</u>	

然る後借方と貸方との差額を損益と朱記して締切る。(商品(2)参照)此場合の ¥272.- は商品販賣益である。

(損) 営業費 (益)	(3) 損益勘定の締切
145.- 損益 145.-	営業費勘定利息勘定の如き損益勘定を締切り,元帳の最後へ開設した損益口座へ移記する準備をする。其の際摘要欄には損益と朱記する。(営業費勘定参照)営業費勘定に朱記された ¥145.- は損失を示す。

(4) 純損益の算出 損益として朱記された金額を商品勘定を初め其の他の勘定の内からさがし出し,其れ等を總て元帳の最後に開設し

た損益口座へ移記し,損失利益を相殺して純損益を見出すのである。(59頁損益勘定参照)損益口座へ移記する仕方は,

商品	
仕入高 3,020	売上高 2,476
損益 272	繰越 816
<u>3,292</u>	<u>3,292</u>

什器	
買入原價 200	繰越 180
	損益 20
<u>200</u>	<u>200</u>

営業費	
家賃其他 145	損益 145

損益(1)	
什器 20	商品 272
営業費 145	

損益(2)	
什器 20	商品 272
営業費 145	
資本金 107	
<u>272</u>	<u>272</u>

- (イ) 損益として朱記したる金額が借方にあれば(商品口座に示すが如く)損益口座の貸方へ黒記し,摘要には其の勘定科目を書く(損益口座(1)の商品参照)
- (ロ) 之れに反して朱記した金額が貸方にあれば,損益口座の借方に黒記する。(損益口座(1)の什器,営業費参照)
- (ハ) 損益口座の借方は損失,貸方は利益であるから,其の差額は純損又は純益である。損失利益は何れも資



資本金	
繰越 1,607	元入高 1,500
	損益 107
<u>1,607</u>	<u>1,607</u>
繰越 1,607	

本主の所得であるから摘要に**資本金**と朱記して締切る。(損益口座(2)参照) 朱記され

た金額が借方であれば、当期の純利益であるから、其れを資本金勘定に移記し、損益勘定の決算は終るのである。(若し朱記された金額が貸方であれば、其れは当期損失であるから反対側の借方に移記する)而して其の際資本金勘定の摘要に**損益**と黒記し、貸方借方を平均して締切る。(資本金勘定参照)

(5) **残高の繰越** 棚卸高を移記した勘定(商品、什器勘定等)の繰越手続は既に済んであるが、其の他の資産負債に属する勘定の残高も次期へ繰越すべきものであるから、貸借の差額を赤インクで金額の少い方へ繰越として記入し、貸

現金	
収入 2,706	支拂 1,165
	繰越 1,541
<u>2,706</u>	<u>2,706</u>
繰越 1,541	

借を平均して締切る。(現金勘定参照)而して繰越高を決算日の翌日日附で朱記した側の反対側

へ繰越として記入し、次期繰越の手続を終る。商品・什器勘定も同様である。(現金勘定参照)

**閉業決算の手続** 以上は営業を繼續する場合の決算手続であるが、若し営業を閉鎖する場合は前記繰越の手続を省き、繰越の代りに残高と記入すればよい。

次に47頁にある元帳口座を決算すれば次の如くなる。

### 元 帳

(左方)		資本金		(右方) 1	
昭和年	摘要 仕	借方	昭和年	摘要 仕	貸方
6 30	繰越	1,607	6 1	現金	1 1,500
			30	損益	元8 107
		<u>1,607</u>			<u>1,607</u>
			7 1	繰越	1,607

(左方)		現 金		(右方) 2			
昭和年	摘要	仕丁	借方	昭和年	摘要	仕丁	貸方
6 1	資本金	1	1,500-	6 2	什 器	1	200-
25	商 品	2	400-	6	營 業 費	1	50-
28	掛 賣 金	2	806-	13	商 品	1	20-
				15	掛 賣 金	1	800-
				30	營 業 費	2	95-
					繰 越		1,541-
			2,706-				2,706-
7 1	繰 越		1,541-				

		商 品		3			
昭和年	摘要	仕丁	借方	昭和年	摘要	仕丁	貸方
6 4	掛買金	1	1,200-	6 8	掛賣金	1	690-
13	諸 口	1	1,820-	20	" "	2	806-
30	損 益		272-	25	諸 口	2	980-
				30	繰 越		816-
			3,292-				3,292-
7 1	繰 越		816-				

		什 器		4			
昭和年	摘要	仕丁	借方	昭和年	摘要	仕丁	貸方
6 2	現 金	1	200-	6 30	繰 越		180-
					損 益		20-
			200-				200-
7 1	繰 越		180-				

(左方)		掛 買 金		(右方)			
昭和年	摘要	仕丁	借方	昭和年	摘要	仕丁	貸方
6 15	現 金	1	800-	6 4	商 品	1	1,200-
30	繰 越		2,200-	13	" "	1	1,800-
			3,000-				3,000-
				7 1	繰 越		2,200-

		掛 賣 金					
昭和年	摘要	仕丁	借方	昭和年	摘要	仕丁	貸方
6 8	商 品	1	690-	6 28	現 金	2	806-
20	" "	2	806-	30	繰 越		1,270-
25	" "		580-				
			2,076-				2,076-
7 1	繰 越		1,270-				

		營 業 費					
昭和年	摘要	仕丁	借方	昭和年	摘要	仕丁	貸方
6 6	現 金	1	50-	6 30	損 益		145-
30	" "	2	95-				
			145-				145-

		損 益					
昭和年	摘要	仕丁	借方	昭和年	摘要	仕丁	貸方
6 30	什 器	元4	20-	6 30	商 品	元3	272-
"	營 業 費	元7	145-				
"	資 本 金		107-				
			272-				272-

## 練習問題

- (1) 次ノ元帳ヲ締切レ、但シ棚卸高商品 ¥ 300.—  
什器 ¥ 45.—

商品		什器
仕入高 600.—	賣上高 400.—	買入原價 50.—

- (2) 次ノ元帳ニツイテ決算セヨ。

資本金	商品		什器
5,000	4,000	3,500	500
掛賣金	掛買金		營業費
3,500	2,000	6,000	140

棚卸 商品 ¥ 2,000.— 什器 ¥ 470.—

## 第十四章 決算諸表

決算後營業の結果を明かにする爲めに、損益計算表、貸借對照表及び財産目録を作る。

商人は毎年一回時期を定めて貸借對照表及

び財産目録を作らねばならぬ。又年二回利益配當をなす會社では配當期毎に作り、株式會社にあつては貸借對照表を公告せねばならぬと商法に規定されてゐる。

第十三章 57 頁の元帳について決算諸表を作れば次の様になる。

(一) 損益計算表 元帳の損益勘定を詳しくしたもので、表の左側に損失を、右側に利益を記入し、一營業期間の損益を明かにすると共に純損益を示すものである。商人は之れによつて損益の原因を知り、將來營業上の參考にするのである。

## 損益計算表

昭和 年 月 日

損	失	金額	利	益	金額
営業費			商品販賣益		
開業諸費	50.-		賣上高	2,476.-	
家賃	50.-		棚卸高	816.-	
給料	30.-			3,292.-	
諸雑費	15.-	145.-	仕入高	3,020.-	272.-
什器					
評価損失		20.-			
当期純益		107.-			
		272.-			272.-

(二) 貸借対照表 貸借対照表は資産、負債、資本金及び当期の純損益を表し、決算期に於ける財産状態を示すものである。損益計算書は元帳口座に損益として朱記されたる金額を集めて作るが、貸借対照表は各口座に繰越として朱記されたる金額を集め、元帳の借方にあるものは貸借対照表の貸方に記入し、元帳貸方にあるものは其の反対の借方に記入して作るのである。

## 貸借対照表

(借方)

昭和 年 月 日

(貸方)

資	産	金額	負	債	金額
現金		1,541.-	掛買金		2,200.-
商品		816.-	資本金		1,607.-
什器		180.-	最初元入	1,500.-	
掛賣金		1,270.-	当期純益	107.-	
		3,807.-			3,807.-

貸借対照表の見方 以上述べた様な手続をして作った貸借対照表の借方には資産、貸方には負債と資本金が當然表はれるのである。而して借方貸方の金額は必ず一致すべき筈である。単式簿記では資産負債表の資産から負債を引いて得た差額を資本金として負債の部に記入し、左方、右方(借方貸方)を平均せしめるのである。云ひ換へれば平均する様にしたのである。けれども複式簿記では元帳資本金勘定に繰越として朱記されたる金額を、其のまま、貸借対照表に轉記して、貸借相方の金額がかちりと一致するのである。其處に複式記帳の特長がある。若し金額一致せざる時は轉記の際何處

かに誤りのある證據であるから、諸帳簿を突合せて誤りを発見せねばならぬ。

当期の純損益は元帳損益口座によれば、

¥107.-となつて居るが、果して其の計算に間違なきや否やを貸借對照表によつて確かめることが出来る。何故なれば、貸借對照表の成立は

$$\text{資産} - \text{負債} = \text{資本金}$$

と云ふ等式が基礎となつてゐるからで、今此の等式の一方の資本金に ¥107.-の増加があつたとすれば、必ず他の項の資産負債の何れかにも其れと同額の變化がなければ此の等式は成立しない筈である。然るに資本金を ¥1,607.-として貸借對照表作成の結果、貸借雙方がびたりと一致するならば、当期純益を ¥107.-とする損益口座の計算に間違なきことの證據と見ることが出来る。

(三) 財産目録 貸借對照表にある資産負債の内容を詳細に表すものである。

### 財産目録

昭和 年 月 日

科目	摘要	内訳	金額
<b>資産之部</b>			
現金	通貨	735-	1,541-
	小切手一枚	806-	
商品	A商品 15個 @ ¥40.-	600-	816-
	B商品 18個 @ ¥12.-	216-	
什器	自転車外何點		180-
掛賣金	一口		1,270-
	松本商店		3,807-
<b>負債之部</b>			
掛買金	二口		
	中田商店	400-	
	川西商店	1,800-	2,200-
			2,200-

### 練習問題

第十三章 (60頁)練習問題ノ(2)ニツイテ

(1) 損益計算書ト貸借對照表トヲ作レ。

- (2) 元帳諸勘定ニ繰越トシテ朱記サレタル金額ヲ集メテ作ル表ハ何表ト云フカ。
- (3) 元帳諸勘定ニ損益ト朱記サレタ金額ヲ集メテ作ル表ハ何表カ。

### 第十五章 第一例題

- 10/ 1 現金 ¥1,000.- ヲ元入シテ營業ヲ始ム。
- "/ " 營業用什器買入 1 代金 ¥100.- 現金ニテ支拂フ。
- "/ 5 米山商會ヨリ掛ニテ買入ル。
- |     |     |          |         |
|-----|-----|----------|---------|
| A 品 | 10個 | @ ¥ 19.- | ¥ 190.- |
| B 品 | 15個 | @ ¥ 18.- | ¥ 270.- |
- "/ 7 田代商店へ掛ニテ賣渡ス。
- |     |    |           |          |
|-----|----|-----------|----------|
| A 品 | 7個 | @ ¥ 22.50 | ¥ 157.50 |
| B 品 | 5個 | @ ¥ 21.50 | ¥ 107.50 |
- "/12 丸山商店へ掛ニテ賣渡ス
- |     |     |           |         |
|-----|-----|-----------|---------|
| B 品 | 10個 | @ ¥ 21.60 | ¥ 216.- |
|-----|-----|-----------|---------|
- "/14 米山商會ヨリ掛ニテ買入ル。
- |     |     |          |         |
|-----|-----|----------|---------|
| A 品 | 20個 | @ ¥ 19.- | ¥ 380.- |
| B 品 | 20個 | @ ¥ 18.- | ¥ 360.- |

- "/16 田代商店ヨリ掛賣代金ノ内 ¥ 200.- 現金ニテ受取ル。
- 10/21 米山商會へ掛買代金ノ内 ¥ 500.- 現金ニテ支拂フ。
- "/25 田代商店へ掛ニテ賣渡ス。
- |     |     |           |         |
|-----|-----|-----------|---------|
| A 品 | 10個 | @ ¥ 21.50 | ¥ 215.- |
|-----|-----|-----------|---------|
- "/28 丸山商店ヨリ掛賣代金ノ内 ¥ 150.- 第一銀行宛小切手第10號ニテ受取ル。
- "/29 本日迄ノ現金小賣高 ¥ 86.-
- "/30 丸山商店へ掛ニテ賣渡ス。
- |     |     |           |          |
|-----|-----|-----------|----------|
| B 品 | 15個 | @ ¥ 21.50 | ¥ 322.50 |
|-----|-----|-----------|----------|
- "/31 本日次ノ通り現金ニテ支拂フ。
- |    |        |    |         |
|----|--------|----|---------|
| 家賃 | ¥ 30.- | 雜費 | ¥ 10.50 |
|----|--------|----|---------|
- "/ " 本日決算棚卸次ノ通り。
- |                   |     |           |         |
|-------------------|-----|-----------|---------|
| 商 品               |     |           |         |
| A 品               | 10個 | @ ¥ 19.50 | ¥ 195.- |
| B 品               | 5個  | @ ¥ 18.50 | ¥ 92.50 |
| 什 器               |     |           |         |
| 自轉車其他の見積價格 ¥ 95.- |     |           |         |

## 第十六章 第二例題

- 12/1 現金 ¥ 1,500.— ヲ元入シテ營業ヲ始ム。
- "/4 自轉車其ノ他什器買入レ、代金 ¥ 150.— ハ現金ニテ支拂フ。
- "/7 中川商店ヨリ掛ニテ買入ル。  
A 品 60個 @ ¥ 12.— ¥ 720.—
- "/9 坂田商店へ掛ニテ賣渡ス。  
A 品 20個 @ ¥ 14.50 ¥ 290.—
- "/10 昭和銀行へ當座預金トシテ現金 ¥ 1,000.— 預ケ入ル。
- "/15 中川商店へ掛買代金ノ内 ¥ 500.— 昭和銀行宛小切手 # 1 ヲ以テ支拂フ。  
(註) #1 は第一號と讀む。
- "/19 村上商店ヨリ掛ニテ買入ル。  
B 品 80個 @ ¥ 7.— ¥ 560.—
- "/21 林商店へ賣渡シ代金ノ内 ¥ 200.— ハ安田銀行宛小切手 # 2) ニテ受取り残額 ¥ 252.50 ハ掛トス。  
A 品 15個 @ ¥ 14.50 ¥ 227.50

- B 品 25個 @ ¥ 9.— ¥ 225.—
- 12/25 坂田商店ヨリ掛賣代金 ¥ 268.— 現金ニテ受取り、直チニ當座預金ニ預入ル。
- "/26 村上商店へ掛買代金ノ内 ¥ 400.— 昭和銀行宛小切手 # 2 ニテ支拂フ。
- "/30 坂田商店へ掛ニテ賣渡ス。  
A 品 15個 @ ¥ 14.30 ¥ 214.50  
B 品 15個 @ ¥ 8.80 ¥ 132.—
- "/ 林商店ヨリ掛賣代金 ¥ 200.— 現金ニテ受取り、直チニ當座預金ニ預ケ入ル。
- "/31 本日次ノ通り支拂フ。  
家賃 ¥ 40.— 諸雜費 ¥ 20.—
- "/ 本日決算棚卸次ノ通り。  
商 品  
A 品 10個 @ ¥ 12.— ¥ 120.—  
B 品 40個 @ ¥ 7.— ¥ 280.—  
什 器  
自轉車其ノ他見積價格 ¥ 145.—

## 第十七章 帳 簿

**主要帳** 仕譯帳と元帳は資産負債及び資本の増減を明かにし、損益の原因を示し、又營業の歴史を知らしむる重要な帳簿であるから主要帳と云ふ。

**補助帳** 元帳の現金勘定を見れば、現金の出入が判り、商品勘定を見れば商品の出入が一切判る、併し内譯が詳らかでない、何の爲めに金を支拂つたのか、又誰に何商品を何程賣つたのか一切不明である。其れで取引の内譯を明細に記帳する帳簿が必要である。此の帳簿を補助帳と云ふ。補助帳の重なるものは

- (1) 現金出納帳
- (2) 仕入帳
- (3) 賣上帳
- (4) 受取手形帳
- (5) 支拂手形帳
- (6) 人名勘定元帳 などである。

**補助帳の目的** は主要簿の不備を補ふと共に

に、主要帳の記入と突合せ誤記を防ぐ爲めである。例へば出納帳の収入高と現金勘定の借方と突合せ、支拂高と其の勘定の貸方とを突合せはす如きが其の例である。

**人名勘定元帳** 掛買掛賣は總て掛買金勘定掛賣金勘定に記帳されてゐる。併し其れ丈では各得意先及び仕入先毎の貸借が判明しない。其れ故人名勘定元帳を設け、其れ等を明かにするのである。補助帳である人名勘定元帳に對して、主要帳である元帳を總勘定元帳と稱へる。人名勘定元帳の様式及び記入法は單式簿記の掛賣元帳、掛買元帳と同様である。

### 得意先元帳

#### 丸山商店

日	附	摘	要	丁 數	掛賣高	取立高	借 又 貸	殘 高
10		12B品	10個 @ ¥21.60		216 -		借	216 -
		2S	掛代金受取 小切手#10			150 -	"	66 -

【註】 第66頁第一例題丸山商店參照



**商業帳簿の保存** 商人は商業帳簿及び商業に関する信書を十ヶ年間保存すべきことが商法に規定されてゐる、之れは後日争ひの起つた時證據となるからである。

### 練習問題

- (1) 補助帳ノ必要ナル理由ハ何カ。
- (2) 人名勘定元帳ト元帳ノ區別如何。

## 第十八章 手形の取引

約束手形及び爲替手形を受取つたり、又は約束手形を振出したり、爲替手形を引受たりした時は、受取手形勘定、支拂手形勘定を開き、之れに記入して貸金・借金の整理をする。

**受取手形** 他人から約束手形又は爲替手形を受取れば、其れ丈金を受取る権利が出来る、其れ故、受取手形勘定の借方へ記入し資産の増加を示す。 受取手形とは金を受取る権利のある手形と云ふ意味であつて、手形を受取つたから受取手形と云ふのではない。又手形金額受取

の期日が来て、其の手形と引き換へに金を受取れば手形の権利は消滅するから、取消し記入の意味に於て受取つた時と反対の貸方に記入して権利の消滅を示す。 約束手形・爲替手形を他人に裏書譲渡したときも同様貸方に記入する。

(貸) 受取手形 (借)

600

商 品

600

【例1】 山田商店ニ商品

¥600.-ヲ賣渡シ、代金トシテ同店振出シ約束手形 #4 ¥600.-ヲ受取ル。

【例2】 中村商店へ商品

¥300.-ヲ賣渡シ、代金トシテ同店振出シ当店受取り森商店支拂ノ爲替手形ヲ受取り、直チニ引受ノ承諾ヲ得タ。

受取手形

300

商 品

300

(借) 受取手形 (貸)

600

【例3】 山田商店振出シ當

店受取りノ約束手形 #4ハ満期日ニ付キ、手形

現金	
600	金額 ¥ 600.- 現金ニテ受取ル。

【例4】 中村商店振出し當店受取り森商店支拂ノ爲替手形 # 5 ¥ 300.-ヲ掛買代金支拂ノ爲メ松田商店へ裏書譲渡ス。

受取手形	300
掛買金	300

支拂手形 約束手形を振出し、又は爲替手形を引受けたときは、其の手形金額に對し支拂の義務を生ず、故に支拂手形勘定の貸方へ記入し負債の増加を表す、後日に至り其の手形金額を支拂つた時は、消す意味に於て振出した時と反對の借方に記入し負債の消滅を示す。

【例1】 中西商店カラ商品 ¥ 2,000.- 買入レ代金トシテ本日附一ヶ月限ノ約束手形 # 5ヲ振出ス。

支拂手形	2,000
商品	2,000

支拂手形	2,000
現金	2,000

【例2】 前記中西商店宛當店振出し約束手形 ¥ 2,000.- 支拂期日ニツキ現金 ¥ 2,000.- ヲ支拂フ。

【例3】 田村商店カラ商品 ¥ 700.- 買入レ、此ノ代金ニ對シ同店振出し西村商店受取當店支拂ノ爲替手形 ¥ 700.- ノ引受ヲシタ。

支拂手形	700
商品	700

支拂手形	700
現金	700

【例4】 前記田村商店振出當店引受ノ爲替手形期日ニツキ現金ヲ以テ支拂フ。

【例5】 中村商店カラ商品 ¥ 500.- 買入レ代金トシテ當店振出し、中村商店

商品	500
----	-----

受取り田口商店支拂ノ	<u>掛 賣 金</u>
爲替手形 ¥ 500.- # 12	500
ヲ振出ス。	

【註】 此の場合當店は豫て田口商店に對し ¥ 500.- の掛賣金の貸あり、其れ故それを目當に爲替手形を振出したので、支拂人は田口商店であるから當店には支拂の義務なし、其れ故手形勘定起らず。

**手形割引** 期日前の受取手形を銀行に持ち出し、割引料を支拂ひ手取金(手形金額-割引料=手取金)を受取つた時は、受取手形の貸方に記入し手形権利の消滅を示し、割引料勘定の借方に記入し損失の發生を示す、割引料勘定の設定なき時は營業費勘定の借方に記入するもよい。

【例1】 山川商店振出シ當	<u>受取手形</u>
店受取ノ約束手形 ¥ 600.-	600
期日前ナレドモ銀行ニ	
割引ヲ依頼シ、割引料	<u>割 引 料</u>
¥ 5.- ヲ支拂ヒ手取金	5

¥ 595.- ヲ受取ル。	<u>現 金</u>
	595

<u>受取手形</u>	300
<u>當座預金</u>	300

【例2】 豫て安田銀行へ取立ヲ依頼シアリタル鈴木商店振出シ當店受取ノ約束手形 ¥ 300.- # 12 本日取立濟ノ通知ガアツタ。

【註】 當座預金の借方へ記入したるは手取金をそのまゝ當座預金へ預入れたからである。

**手形帳** 手形に關する詳細のことを記入する爲めに、受取手形帳と支拂手形帳とを設ける、其の様式及び記入例は次の通り。

## 受取手形記入帳

日附	摘要	金額	種類	番号	支拂人	裏書人又ハ 振出人	支拂場所	手形 日附	期間	引受 日附	満期日	額 日附	摘要
1 18	商品賣代金	500	手形	10	川田商店	山本商店	第三銀行	1 18	一ヶ月		2 18	2 18	期日支拂

## 支拂手形記入帳

日附	摘要	金額	種類	番号	受取人	振出人	支拂場所	手形 日附	期間	引受 日附	満期日	額 日附	摘要
1 16	商品買入代	1,140	手形	1	田上商店	當店	安田銀行	1 16	14日		1 30		

## 練習問題

- (1) 中村商店へ商品 ¥ 300.- ヲ賣渡シ代金トシテ同店振出シ當店受取ノ約束手形 ¥ 300.- # 2 ヲ受取ル。
- (2) 中村商店振出シ當店受取ノ約束手形 ¥ 300.- ハ期日ニツキ手形金 ¥ 300.- 現金ニテ受取ル。
- (3) 大山商店へ商品 ¥ 1,200.- 賣渡シ代金トシテ同店振出シ當店受取り田村商店支拂ノ爲替手形ヲ受取り直ニ引受ノ承諾ヲ得タ。
- (4) 齋藤商店カラ商品 ¥ 500.- 買入レ代金トシテ本日附一ヶ月限ノ約束手形 ¥ 500.- ヲ振出ス。
- (5) 小山商店ノ掛買金ニ對シ同店振出シ當店支拂山川商店受取りノ爲替手形 ¥ 400.- ノ呈示ヲ受ケ引受ヲ承諾ス。
- (6) 中川商店振出シ當店受取ノ約束手形 ¥ 1,300.- 期日前ナレドモ銀行ニ割引ヲ

依頼シ割引料 ¥5.- 支拂ヒ、手取金 ¥1,295.-  
ヲ受取ル。

- (7) 豫テ安田銀行ニ取立ヲ依頼シアリタル  
約束手形 ¥3,000.- 本日取立済ノ通知アリ。

### 第十九章 第三例題

- 1/4 現金 ¥3,000.- 木造建物貳拾坪 ¥2,000.-  
ヲ元入シテ營業ヲ始ム。
- "/6 安田銀行へ現金 ¥1,500.- 當座預金トス。
- "/9 大倉商店ヨリ掛ニテ買入ル。  
松印小麥粉 100袋 @ ¥3.50 ¥350.-
- "/15 電話其ノ他什器ヲ買入レ代金 ¥1,300.-  
現金ニテ支拂フ。
- "/16 田上商店ヨリ次ノ通り買入レ代金ノ内  
¥600.- ハ安田銀行宛小切手 #1ニテ支  
拂ヒ、残額 ¥540.- ニ對シ本日附本月卅日  
限同店宛約束手形 #1ヲ振出ス。  
竹印小麥粉 300袋 @ ¥3.80 ¥1,140.-
- "/20 森商店へ掛ニテ賣渡ス。

- 松印小麥粉 70袋 @ ¥4.20 ¥294.-
- 1/23 大倉商店へ掛買代金 ¥350.- ヲ安田銀行  
宛小切手 #2ニテ支拂フ。
- "/24 森商店ヨリ掛賣代金ノ内 ¥300.- 同店振  
出當座小切手ニテ受取り、右小切手ハ直  
ニ安田銀行當座預金ニ預入ル。
- "/25 中西商店へ掛ニテ賣渡ス。  
竹印小麥粉 250袋 @ ¥4.50 ¥1,125.-
- "/29 中西商店ヨリ掛賣金ニ對シ同店振出シ  
小切手 ¥500.- 及ビ本日附來月十日限同  
店振出約束手形 #10 ¥625.- ヲ受取り小  
切手ハ安田銀行當座預金ニ預入ル。
- "/ 安田銀行ヨリ當座預金 ¥200.- ヲ引出ス。
- "/30 本月十六日附當店振出、田上商店宛約束  
手形 #1ハ滿期日ニ付此手形金 ¥540.-  
安田銀行宛當座小切手 #4ニテ支拂フ。
- "/ 本日次ノ通り現金ニテ支拂フ。
- |     |       |
|-----|-------|
| 諸雜費 | ¥30.- |
| 倉敷料 | ¥20.- |
| 給料  | ¥50.- |

1/30 本日決算棚卸次ノ通り。

商 品

松印小麥粉 30袋 @ ¥3.50

竹印小麥粉 50袋 @ ¥3.80

什 器

電話其の他 見積價格 ¥1,290.—

不動産

瓦葺木造建物貳拾坪 ¥1,980.—

## 第二十章 仕譯帳の分割

賣買業に於て最も頻繁に起る取引は現金取引である。其れ等を一々現金出納帳に記入し、更に仕譯帳に仕譯して又元帳へ轉記することは非常の手續を要する。此の手續を省き且つ記帳事務を數人に分担せしむる爲めに仕譯帳の分割をする。其の最も簡單なる方法は仕譯帳を二つに分割し、現金の出入を伴ふ取引は總て現金出納帳に仕譯し、其の他の取引丈を仕譯帳に記帳するのである。此の場合現金出納帳は仕譯帳の務をするのであるから主要帳であ

る、補助帳ではない。次に現金出納帳の様式と記入例を示さう。

**記入の仕方** 此の出納帳の借方には總て現金が借方になる取引を記入し、其の貸方には現金が貸方になる取引を記入する。其の際勘定科目には相手の勘定科目を、摘要には取引要領を記入することは云ふ迄もない。

**元帳へ轉記の仕方** 出納帳の借方にある勘定科目例へば資本金、商品、掛賣金等は現金に對する相手勘定であるから總て貸方に出るべき勘定科目である。故に元帳轉記の際、其の勘定の貸方へ轉記し、摘要に現金と書く、それと同様に、出納帳の貸方にある勘定科目例へば什器、營業費等は一々其の勘定の借方へ轉記すればよい、轉記済の上は出納帳の元丁欄へ轉記済口座の丁數をそれぞれ記帳して轉記済の證とする。

**現金勘定の省略** 此の場合の現金出納帳は、仕譯帳たると共に、現金勘定の務めも果たすものであるから、元帳には殊更現金勘定の口座を設けずに、此の帳簿を元帳の一部と見ることが

出来る。併し元帳をして總勘定を保たしめんには、之れに現金口座をも開き、此の帳簿から、收支共一まとめに、轉記しておくべきである。即ち出納帳の借方合計は、當月收入總額として元帳現金口座の借方に、又貸方合計は支出總額として口座の貸方に轉記する。

### 記入例題

### 現金出納帳

昭和 年	貸方 勘定	摘要	元 丁	借方	昭和 年	借方 勘定	摘要	元 丁	貸方
6	1	資本金 資本元入	1	1,500	6	2	什器 租其他買代	4	200
	25	商品 商品代金	2	400		6	營業費 開業諸入費	7	50
	28	掛賣金 小切手	6	806		8	商品 引取運賃	2	20
						15	掛買金 中田商店拂	5	800
						30	營業費 家賃 ¥50	7	95
							給料 ¥30		
							電燈 ¥15		
							瓦斯 手元有高		1,541
				2,706					2,706
		繰越		1,541					

### 練習問題

- (1) 仕譯帳ヲ分割スレバ如何ナル利益ガアルカ。
- (2) 現金出納帳ノ借方ニアル勘定科目ハ元帳ノ借方、貸方ニ轉記スルカ。
- (3) 現金出納帳ノ貸方ニアル勘定科目ヲ元帳ノ借方ニ轉記スル理由ヲ答ヘヨ。
- (4) 次ノ取引ヲ現金出納帳ヘ記入シ後元帳ヘ轉記セヨ。
  - 2/1 現金 ¥3,000.- ヲ元入シテ營業ヲ始ム。
  - 7/2 現金 ¥1,000.- ヲ安田銀行ニ當座預金トス。
  - 7/5 什器ヲ買入レ代金 ¥200.- ハ現金ニテ支拂フ。
  - 7/6 田村商店ヨリ商品 ¥300.- 現金ニテ買入ル。
  - 7/10 中西商店ヘ商品 ¥200.- 現金ニテ賣渡ス。
  - 7/15 大山商店ヨリ掛賣代金 ¥500.- 現金ニテ受取ル。

## 第二十一章 第四例題

- 3/1 現金 ¥3,500.— 電話 ¥1,250.— 借入金  
¥1,000.— ヲ元入トシテ營業ヲ始ム。
- "/2 安田銀行へ當座預金トシテ現金 ¥3,000.—  
預入ル。
- "/ " 池田商店ヨリ營業用什器買入レ代金  
¥300.—ハ安田銀行宛當座小切手 #1ヲ  
以テ支拂フ。
- 3/3 帳目其ノ他文房具郵便切手等ヲ買入レ  
代金 ¥50.— 現金ニテ支拂フ。
- "/6 内海商會ヨリ買入レ代金ノ内 ¥2,000.—  
ハ本日附一ヶ月限ノ約束手形 #1ニテ  
支拂ヒ殘額 ¥4,000.—ハ掛トス。  
五號揮發油 500箱 @ ¥5.— ¥2,500.—  
竹印石油 1,000箱 @ ¥3.50 ¥3,500.—
- "/10 荒川商店へ賣渡シ代金ノ内 ¥400.—ハ現  
金ニテ受取り殘額 ¥1,000.—ハ掛トス。  
五號揮發油 200箱 @ ¥7.— ¥1,400.—
- "/12 中西商店へ掛ニテ賣渡ス車力賃 ¥20.—

現金ニテ支拂フ。

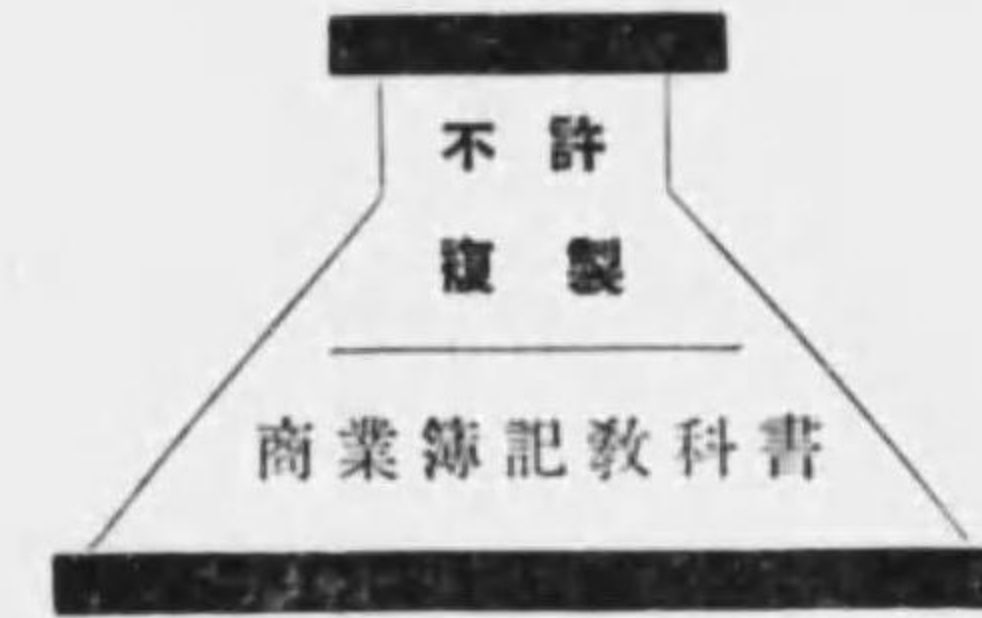
- 五號揮發油 100箱 @ ¥7.— ¥700.—  
竹印石油 400箱 @ ¥4.50 ¥1,800.—
- 3/18 山本商店へ賣渡シ代金ノ内 ¥500.—同店  
振出シ當店受取り川田商店支拂期限一  
ヶ月ノ爲替手形 #10ニテ受取り殘額  
¥850.—ハ掛トス。爲替手形ハ直ニ引受  
ノ承諾ヲ得タ。  
竹印石油 300箱 @ ¥4.50 ¥1,350.—
- "/21 荒川商店へ賣渡シ代金ノ内 ¥500.—第一  
銀行宛小切手ニテ受取り殘額 ¥1,000.—  
ハ掛トス。  
五號揮發油 150箱 @ ¥7.— ¥1,050.—  
竹印石油 100箱 @ ¥4.50 ¥450.—
- "/25 廣告料 ¥300.— 安田銀行宛當座小切手 #2  
ニテ支拂フ。
- "/28 内海商會へ掛買代金 ¥2,000.—支拂ノ爲  
メ安田銀行宛當座小切手 #3ヲ振出ス。
- "/29 内海商會へ掛買代金支拂ノ爲メ安田銀  
行宛當座小切手 #4 ¥1,500.—ヲ振出ス。



- 3/1 荒川商店カラ掛賣金ノ内 ¥1,500 ハ同店  
振出シ第一銀行宛小切手 # 20 ニテ受  
取ル。
- "/30 次ノ通り掛賣代金取立テ安田銀行當座  
預金へ預入ル。  
¥ 2,000.— 中西商店ヨリ  
¥ 800.— 山本商店ヨリ
- "/1 本日次ノ通り現金ニテ支拂フ。  
家賃 ¥200.— 給料 ¥150.— 雜費 ¥50.—
- 3/30 本日決算棚卸次ノ通り。  
商 品  
五號揮發油 50箱 @ ¥5.— ¥250.—  
竹印石油 200箱 @ ¥3.50 ¥700.—  
什 器  
電話其ノ他何點見積價格 ¥1,520.—

商業簿記教科書 下卷終

昭和四年三月十八日印刷  
昭和四年三月三十一日發行



下卷 定價 金貳拾貳錢  
昭和四年度 臨時定價 金參拾五錢

著 作 者 商業教育研究會  
東京市本郷區本郷六丁目二番地

發 行 者 石 田 嘉 一  
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印 刷 者 橫 山 喜 助

發 行 所 東京市本郷區本郷六丁目  
電話小石川 { 三二七八番  
三二七九番  
振替東京三〇九一八番 } 文 信 社

東京販賣 東京市神田區錦町一丁目一番地 岩 田 文 憲 堂

東 部 販 賣 東京市京橋區銀座三丁目一番地 東 海 堂 書 店

西 部 販 賣 大阪市東區北久太郎町四丁目 柳 原 書 店

319  
512

特254

885



終